

## 菩薩第三地の問題

平野修

世親は第三光明地を註釈するにあたって四つの観点をたてる。

(a)離欲の行を生起すること（起厭行分）(b)離欲の行（厭行分）

(c)離欲すること（厭分）(d)離欲の果（厭果分）

ではこの四点がどのようにして世親に獲得されたかと言えば、十地経第三地冒頭の経文の分析に依ると考えられる。その第三地冒頭の経文とは第二地にある菩薩が如何なる仕方で第三地に入るかを説くものである。要約して引用してみよう。

「第二菩薩地で深心 (adhyastava) がよく浄められた菩薩は十種の心意の作意 (cittasāyamaṅgaḥkara) によつて第三地に入る。十とはすなわち、①清浄なる心意の作意、②不動なる（心意の作意は以下略する）、③厭離せる (virya)④離欲せる (aviraśa)、⑤不退なる、⑥堅固なる、⑦明燃たる、⑧厭足せる、⑨勝妙なる、⑩偉大なる心意の作意である。」

この経文の十句がテーマとなつて第三地全体を構成するというのが世親の視点である。この場合、十句は先の四点のうちどこに包含されるかと言えば、④に相当すると世親は言う。しかし他の三点と無関係ではない。紙数の関係上詳説できないが、四点と十句の関係を表示すれば次の様になる。

④ — ① ② — ③ ④ ⑤ — ⑥ — ⑦ ⑧ — ⑨ ⑩

この菩薩第三地の問題は第二地で十善業道によく耐えた菩提心（④—①②）の上に見い出された欲に沈む衆生という新しい課題である。こゝで言う「欲に沈む衆生」とは菩薩自身を含めた一切の衆生という意味である。

今、この問題をわれわれは⑥群によつて考えてみよう。

④—③、④、⑤、⑥群は離欲の行を意味し、経文で言えば、四禪四無色定に入る前までの部分に相当する。

世親は離欲の行に三種ある、と述べている。

①雑染より守る行、②小乗より守る行、③方便を撰受する行の三種である。

この中、①の意味は一切有為法の無常と自他の常住でないことを観察することである。有為法に関する如実な観察がないところに苦、悲、悩等につままれ、貧腫癩の火に焼かれるという雑染の現実があらわれる。その対治として観察 (prativedā) の行が説かれるのである。またこれは十句で言えば、③④と相応する。

次に②小乗より守る行とは世親によれば、「有為より心を守り、（如来の智慧の）二種の偉大性を示すことによつて如来の智慧に向わしめ有情についての十種の心の意向をおこし、彼等を救うために精進を發す」と言われている。この②は⑤と相応し、⑤に対する世親の註は「自らの乗（こゝでは大乘）を退かないこと」とある。

単に「雑染より心を守る」であれば、別に大乘と言わなくとも、釈尊在世からあることである。だから、こゝでは、このような現実をいかなる仕方で解決するかが問題となる。個人的な解決の道も考えられるが、それは考えられるだけであつて現実には在り得ない。では、先ず自らが解決して、その後、他を教化するという解決法は

可能であろうか。これも成立しない。前者が空虚な観念論であれば、後者は懦弱な理想論に過ぎない。こゝに第三地の菩薩の実践上の困難な、破り難い壁があると云える。この実践上の課題に答えるものとして「如来の智慧の二種の偉大性」が説かれてくる。二種の偉大性とは、功德と清浄とであると世親は言う。

では、これがどうして先に言う菩薩の課題の答えと云えるのであろうか。また、いかなる理由で大乗の行と云えるか、更にまた、こゝで突然何故に如来の智慧が説かれてきたのであろうか。

それは次の如く考えられるであろう。つまり、生死の衆生でありつゝ菩提心と關係するという菩薩の在り方そのものに由来している。ということは菩提心に於て見出された課題は菩提心によつて解決されねばならないことを意味する。したがつて菩提心という相をとつた如来の智慧こそが問題となつてくるからである。

その消息を經典は「彼（菩薩）は如来の智慧の不思議なる性を普く眺め（Samantapāsādi）」と表現している。が、何処に眺めるかを明示していない。しかし、それは菩提心に於てであることは疑いないであろう。その理由は經典に「此等の衆生を私は救わん」という願の表現があるからである。

①—⑤系列で明らかになつたことは①—③、④系列の難染の現実の共同を自覚した菩提心がその問題の解決を小乗という在り方や外教的在り方（——菩提心以外の何かによつて解決すること——）を超え離れて菩提心自身によつてなそうとすることである。この事を經典は次の様に述べている。

「一切の有為の法を厭離し、一切の衆生を愍念し、一切智者の智を讚嘆するに至り」と。

世親は厭離 (nivīdi)、愍念 (apeksā)、讚嘆 (anusamāsa) は難染、生死を捨てないこと、精進を發することの因であると語つている。それは、菩提心が菩薩の一切の行為の因であることを意味する。そこで、因（願）がそれ自身を成就するためにどうしななければならないか。それが①—④—⑤の系列である。

世親は④方便を撰する行に三種あると云う。(一)究竟を証すること、(二)究竟を完成させるものを次々に証すること、(三)究竟が成就する所依の行を証することである。この中、究竟とは世親に依れば「無蓋の智慧」の意味である。また、(三)の所依の行とは「聞法に巧みとなること」である。

また、⑥は註によれば、「自地（こゝでは第三地）の煩惱によつて動揺しないこと」とある。經文と照合するとこゝに言われる煩惱とは名聞・利養等の自己関心である。

これらの点から①—⑥系列は次の様な意味をもつ。すなわち、方便 (upāya) とは菩提心が菩提心自身を客観化することである。また、この客観化ということが「証する (trogas, adhiḡama)」ということであろう。この点からのみ教説「言葉の位置が定立される。(三)に「聞法に巧みとなる」と語られる所以である。

言説・名義として客観化することは自を否定し、他という相をとつて、自を保つということである。このことは別の言葉で言えば「莊嚴」ということであろう。そして、この方便ということは同時に「自利々他」の行を意味する。

以上の如く④項は要約すれば、智慧・慈悲・方便の大乗菩薩道を語つていたのである。世親はそれら三者の内的關係を菩提心の中で明らかにしようとしたものである。